2023(令和５)年度　学校推薦型選抜　基礎学力検査

文学部　比較文化学科
小論文

【注　意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は13時00分から15時00分まで(120分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に8ページあり、解答用紙は4枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙の解答欄に記入してください。
6. 解答用紙の氏名欄を除き、受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題Ⅰ　次の英文を読んで、以下の設問に答えなさい。

To truly learn a language does not mean learning just the rules and sentence parts, but getting a feeling for beauty and meaning. Language is a vast sea of cultural ideas, creative expressions, and complex meanings. To handle all these powerful ideas, and to get to the beautiful, meaningful nature of language, what is most needed is art, not structure. Learning a language is really learning the art of conversation.

People who learn languages well are usually not so good at grammar; but they are always very good at conversation. They know the art of conversation, a skill that involves basic human qualities: an interest in people, the ability to listen carefully and ask good questions, and a degree of personal warmth. That is the art.

This human art of conversation is not easy to teach. Grammar is much easier, since it is condensable* into worksheets and right and wrong answers for tests. Grammar has a definite starting and stopping point, and can be handled with efficiency and order. Art, however, is subjective, messy and undefined. Art takes a long time to set up and get going, and is hard to stop just because the bell rings for the next class. (1) It does not fit school schedules easily.

Most speaking books give short conversations, so students get the idea that conversations are just a few lines long. Here is a typical textbook example:

Maria: Excuse me, can you tell me where the Smith Building is?

Ken: Sure, go down this street to the traffic light, then turn right and it's straight ahead.

Maria: Is it a big building?

Ken: Yes, quite big. You can't miss it.

Maria: Does it have "Smith" written on it?

Ken: I'm not sure. Listen, I'm going in that direction. I'll just show you.

This kind of practice conversation is about grammar practice. It is not very interesting. It does not sound real.

In contrast, real conversation can be endless. I have a Japanese friend who always asks me question after question when I talk with her. I forget I am even talking because she can create a flow of exchange that never seems to stop. She says things like:

That's interesting. I never knew that.

What do you mean by that?

Where did you learn about that?

Why do you think so?

I wonder why that is.

How did that happen?

She also tells her opinions and little stories, too, but the conversation with her always remains fascinating because she knows how to engage fully in the conversation. Her grammar level is only so-so*, but (2) her conversation level is exceptional. I wish English textbooks taught those conversation-extending and conversation-deepening phrases.

(3) What makes a good conversationalist? Of course, knowing some grammar rules helps, but only knowing the rules helps you very little. Instead, conversation involves a few easily learned techniques such as conversation starters, topic changing phrases, follow-up questions, or open style questions. A few idioms can help, and for English, the ability to

interrupt helps a lot, too. Some non-verbal 'tricks' like looking more directly in people's eyes if they are from western countries, nodding one's head to signal "I am listening," and responding quickly also help to keep conversations going.

Mostly, though, the art of conversation is built on real questions that come from natural curiosity. Some people are good at getting you to talk and keep talking. That is not a fake ability, but a genuine interest in knowing more, learning more, hearing different and unusual ideas, and being unafraid to express one's own thoughts. That can be a bit scary* at first, but, is exciting as well. Conversational artists know how to get past the grammar rules to open people up, explore ideas, discover feelings and enjoy language.

(Adapted from Michael Pronko, "The Art of Conversation," *Inbound / Outbound Japan*)

（注）*condensable：凝縮できる、要約できる
*so-so：良くも悪くもない、まあまあの
*scary：おそろしい

問１　下線部（１）のように筆者が考える理由はなんですか。本文に即して１３０字以内の日本語で説明しなさい。（２０点）

問２　下線部（２）のように筆者が考える理由はなんですか。本文に即して１２０字以内の日本語で説明しなさい。（２０点）

問３　下線部（３）に対して、筆者自身はどのように答えていますか。本文に即して２００字以内の日本語で説明しなさい。（３０点）

問４　筆者が述べている文法についての考えをあなたはどのように考えますか。あなたの意見を英語で述べなさい。（３０点）

問題Ⅱ　次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

日本人は笑いを知らないとか、ユーモアを解さないとかいうことをよく耳にする。これはほんとうなのであろうか。

欧米の政治家が議会の演説やセレモニーでユーモアをまじえたスピーチをするのに、日本の政治家ときたらまるでユーモア感覚がなく、いつもコチコチのスピーチをしていることを思うと、日本人がユーモアを解さないという言い方がまかり通るのも無理ないようには思われる。なるほど公的な場での笑いは確かに乏しい。

飯沢匡(ただす)氏によると「今日でも江戸の指導階級、サムライたちの儒教的思考を受けついだ政治家たちは笑いに対して鈍感である。何を笑うかという勉強より、笑われまいという努力に力点がかかっているようだ」と日本人の笑いの欠乏を指摘する。

飯沢匡氏は、明治末年の生まれで、東京山の手文化の中で育てられ、自らの家庭を振りかえって、「私が育った家では、もちろん笑いはタブーであった」と述べている。「女中などが高笑いしていると父の書斎から呼鈴が鳴り、駆けつけると母が呼び出され『何故あのような笑い方をさせるのか』と母が叱責されるのであった」。

私はこの箇所を読んだ時、ちょっと信じられない思いであった。ふだんの生活の中に何の笑いもなく、笑いはタブーであったということは、私の生活体験からおよそ信じられないことであった。

なるほど、サムライの気風を残している家庭ということになるとそうかも知れないと思う。江戸時代のサムライの間には、「三年に片頬」という言葉もあるではないか。サムライたるもの、むやみに笑ってはいけない。笑ったら人を傷つけ、争いのもとになる。「三年に片頬」程度の笑いにしておけというのであるから、どれだけ笑いをいましめ、抑制したかがわかる。

深作光貞氏が『日本人の笑い』の中で、やはり同様のことを述べている。「日本で、家中がはなやぐときがあるとすれば、おそらく愛らしい孫たちが、祖父母のところに来たときであろう。なぜなら、大人たちは、平素あまり笑

う機会も雰囲気もない。いつもゲラゲラ自由に笑う特権をもっているのは、日本では、子どもたちだけである」。

深作氏はさらに考察を進めて、日本の笑いにはハレとケでの使いわけがあったと言う。「日本の社会の中に、何か大笑いを抑制する重い圧力があるのである。正月や祭以外のとき、大笑いしようものなら『バカ笑い』といわれ、笑いつつ飲み唄えば『バカ騒ぎ』と非難される。つまり、正月や祭のときは歓迎され、日常の日々には非難されるわけだから、日本では派手な笑いに対して『ハレ』と『ケ』とがあり、日常に於いては目に見えない規制を受けているわけである」。

笑いが人を傷つける、攻撃として受けとられる、そういう気風の強いところでは、日常生活の中から笑いが追放されるのは当然である。笑いは人間関係を損うものとして、ひいてはまとまった共同体を破壊するものとしてとらえられているわけだ。

しかし、人間は笑う動物であり、笑わずにはおれないのである。公的な場から締め出され、ケの場からも追い出された笑いは、「正月や祭り」のハレの場で許されるということになっていったのであろう。

日本人が「笑わない」とされるのは、そもそも最初から笑ってはいけないとされている場においてそうなのであるということであり、ここでは笑ってもよいという了解のある場では、日本人も大いに笑っているということである。

評論家の加瀬英明氏は、外国と日本のユーモアを比較して、その特徴の違いとして、この場の問題をあげている。

「ホワイトハウスやロンドンの首相官邸の会議、最高戦略を決定する作戦会議、新聞の論説委員会といったように、向うの著名人たちの回想録や記録を読むと、私たちには想像できないような真面目な席上で、参会者の口からでてくるのだ」「ところが日本では真面目なことを話す席上では冗談めいたことはいってはならないことになっている」。

欧米人の場は、笑ってよい場とよくない場とかの区分はないというのである。日本人のような切り替えをしていないというわけである。そこに個人が

いて、個人がユーモアを発すれば、場などには関係がなく、その場に笑いが起こるのである。

私は大阪の商家に生まれ育ったという関係であろう、先の飯沢匡氏や深作光貞氏が描くところのふだんの生活の場からは笑いが追放されていたという家庭を実感として受けとめ難いのである。

商家では、大勢の店員さんがおり、さまざまな人が出入りをし、そういう店の動きと家庭とが一体となって、日常生活が展開されている。そこにはいつも笑いが満ちていたと言ってもよい。店員さんたちはお客さんとよく冗談を言い合っているし、笑わしたり、笑われたり、何よりも笑いに対して寛大であった。電話で商談をしている人でも、用件の話をしているのやら冗談の言い合いをしているのやらわからないにぎやかな人がいた。笑いがあることで活気があり、それが当たり前のふだんの生活であった。奥で女中さんが笑っているからと言って誰も叱りはしなかった。

商人の家庭では、こうした気風が一般的であったと思う。お客さんに失礼をかけてはいけないが、笑いを活気の材料として使いこそすれ、タブー視するなどということはまず考えられないことであった。江戸時代この方、商いの都として発達をみた大阪は、笑いに対して寛大なまちである。というよりも、笑いの名手は尊敬されるのである。笑わせることの上手な人は、それが美徳のひとつともされるのである。

笑いの場に関しても、「日本人の笑い」ということで言えば、場の使い分けが一般的であるが、大阪では、その区分け意識はかなり稀薄であると言ってもよいだろう。何しろ商いすること自体、商談すること自体が公的な活動であり、その中で笑いが効果的に使われるのであるから、笑いをどこか特別な場でのみ許容しようなどという考えは生ずるわけがないのである。

商人社会というのは、一体どういう社会なのであろう。商人の生活の基礎は「利」をあげることにあり、そのことがふだんのいちばんの関心事である。名誉や権威、出世やエエカッコは、最たる関心事ではない。この点は、まったくサムライと違う点だ。

「根」をつめて働いて、「利」をあげるのであるが、そのためには、どなた

さまもお客さんとして、世間と仲良くしなければならない。敵を作るのではなく、「和」をもってつき合わなければならないのである。相手が気にいらない奴だからといって、ケンカをしては、客を失うことになる。客あっての商いである。刀を抜いてケンカのできるサムライの生き方と違った生活態度が生まれるのは当然のことであろう。「根」をつめて働き、世間さまと仲良くして、「利」をあげて何をするのか。出世をしたいのか、名誉にありつきたいのか、権力を手にしたいのか、そうしたことは、あとまわしである。商いすること自体を楽しみたいと思っているし、「楽」のない生活・人生は価値がないのである。したがって、自ら「楽」を求めるのに熱心である。

サムライ社会を、身分・格式にうるさいタテ社会とするならば、商人社会は、もっぱら経済的関係を横に広げてつながっていこうとするヨコ社会と言うことができる。刀をぶら下げていようがいまいが、田舎から出てきたものであろうがなかろうが、彼らがお客さんであれば、どなたさまでも関係を取り結ぼうとするのが商人である。ヨコにつながろうとし、ヨコとの距離を近くにとろうとするのが商人である。

ふだんの生活においても、自分の近くに笑いが起こったら、まず自分が笑われているのではないかという思いにかられる人は、タテ社会の意識を無意識的にしろ引きずっている人ということになろう。

しかし、こういう人もいるのである。身近に笑いが聞こえたら、何よりもそこにおもしろい話があるに違いない、だから寄って行って「何を笑っているの、私に聞かして」と笑いの中に入っていこうとする人もあるのである。「実は、あなたのことを噂してたの」と言われても、どんな噂してたの、聞かせてと、その人なら言うであろうし、それが自分を馬鹿にしている話であっても、「そんなことで笑ってたの、アッハッハッ」で終わってしまう。

こんな風にならない人が多いので、日本人の笑いというと、「ユーモアがない」とか、「笑いを知らない」とか言われるわけである。

そこで指摘したいのが、大阪の笑いである。まず大阪では、笑いを「攻撃」として受けとめる意識は、きわめて乏しい。人が笑っていても自分が笑われていると思うよりも、あの人は何かおもしろいことがあるらしいなと見てし

まう。

ふだんの日常生活において、商人の生活というのはタテ社会の人間関係の中で暮らしているという意識がないので、笑いをまず自らへの「攻撃」として受けとめる意識が乏しい。組織や制度に頼ることのできない独立した商人の生活意識は、ヨコ社会の人間関係を反映し、笑いは「協調」として、人と人とをつなぐ機能を果たすものとしてとらえられる。したがって、先に見た笑いの場の区分け意識は、商人社会においては、稀薄あるいはあいまいであるということが言える。

（井上宏『笑いの人間関係』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。）

問１　筆者は、サムライ社会と商人社会のそれぞれが「笑い」をどのように捉えていると述べているか。300 字以内で説明しなさい。（50 点）

問２　下線部について、「笑い」以外で、人と人とをつなぐ「協調」の機能も果たしうる行為を挙げ、どのような場でそのような機能を果たしうるかを 400 字以内で具体的に説明しなさい。（50 点）